

## ハルビン郊外の深い爪痕

高村 壽一

シベリア鉄道は遠くはるかモスクワに通じている。その路線の中国最北の大都会が黒竜江省の省都である哈爾濱（ハルビン）である。人口九百七十五万人。夏の温度は三十度、冬は逆にマイナス三十度になる。しかし、人々の顔は経済成長のせいかわるい。

帝政ロシア時代の欧州風建築を観て歩くのも一興だが、観光客が集まるのは、冬の一大イベント氷雪祭りだ。中央大街（キタイスカヤ）は一年中遅くまで人々ににぎわう。ビール消費量はミュンヘン、モスクワに次いでハルビンが世界第三位という。クルマのラッシュ緩和のために目下地下鉄を建設中で、活気に溢れている。

この北の大都会を訪れてこちらも元気をもらったが、旅の日程のひとつ、ハルビン郊外（南方20キロ）の平房（ピンファン）地区に行ってみて頭をガツンとやられた。ここに旧日本軍の細菌戦の拠点、関東軍第七三一部隊（通称石井部隊）の遺址が、証拠品類ともに公開・展示されているのである。現場には「人食い魔窟」の跡と記され、侵略日本軍細菌戦の最大被災地というような説明がなされていた。戦争犯罪の深い爪痕である。

第七三一部隊はこの地区で一九三六年から敗戦まで細菌兵器の研究・開発を行った。中国、朝鮮、ロシア、モンゴルの政治犯、スパイ、浮浪者などの捕虜（「丸太」と称した）を人体実験し、約三千人が犠牲になったとされている（この数字は誇大という説もある）。

開発実験のために中国各地でペスト、コレラなどの細菌を散布した。関東軍は撤退の際、隠蔽のために特設監獄、人体実験の場など中枢部を爆破したが、ボイラー室煙突、総務部室の建物など周辺部分は遺っており、なお発掘・修復作業も続けられている。日本人として観るのは辛い、動かせない犯罪遺址である。

「アウシュビッツ、ヒロシマのように世界遺産とすべきだ。登録作業が進んでいる」と案内人。その準備の一環か売られている大判写真冊子は中国・英語版である。

第七三一部隊については森村誠一氏の『悪魔の飽食』三部作が知られている。初版（光文社）には写真誤用があって話題になったが、いまは訂正された角川文庫に収録され、取材ノートを含め全容を知ることができる。しかし現場に佇むと、戦時の集団狂気に改めて痛撃される。

「戦争なのだから」「お国のためだった」という声も聞く。しかし、ひとたび戦争が起これば、大きな渦に巻き込まれ、個人の自覚など消滅してしまう恐ろしさは消えない。

第七三一部隊の上級隊員は帰国後も「秘密を漏らすな」を合言葉になぜか生き長らえた。彼らは高度な細菌技術・資料を米国側に提供したために「戦犯免除」になったと憶測されている。戦後は終わりではなかった。その後の朝鮮戦争、ベトナム戦争などで米軍が用いた細菌兵器には、旧日本軍の技術の応用があったとされている。

さらに「人間の生命を自分（個人）の医術の素材視する思想は、日本の医学界にいまも生き続けている」と指摘する識者もいる。ハルビン郊外の「集団狂気」は60年前の悪夢だと忘れ去るわけにはいかない。

（たかむら・じゅいち：1938年生まれ。日本経済新聞・論説委員を経て現在、武蔵野大学名誉教授・大学院客員教授（産業組織論・企業経営論）、新日鉱ホールディング社外取締役。著書『日本の産業・昭和の歩み』ほか。今夏、「近現代の検証の旅」に参加）